

ひきこもり親和群の下位類型 —ひきこもりへの移行可能性に注目して—¹⁾

日本学術振興会特別研究員 PD・東京学芸大学 渡部 麻美

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 松井 豊

明星大学大学院人文学研究科 高塚 雄介

The subtypes of affinity group for social withdrawal; Focusing on the transition to social withdrawal.

Asami Watanabe (*Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science, Tokyo Gakugei University, Koganei 184-8501, Japan*)

Yutaka Matsui (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba*)

Yusuke Takatsuka (*Graduate School of Humanities, Meisei University*)

This study reanalyzes data of the Tokyo Metropolitan Government Office for Youth Affairs and Public Safety (2008). The purposes of the study are to classify affinity groups that show an affinity for social withdrawal into their subtypes and to examine the possibility of transitions to social withdrawal. The results of a cluster analysis for 66 samples of affinity groups identified four subtypes; namely, "low esteem dependent", "low esteem independent", "high esteem dependent" and "high esteem independent". Of the four subtypes, "low esteem dependent" has similar traits with withdrawal groups. It is suggested that the "low esteem dependent type" corresponds to a "reserve army for the socially withdrawn". The other three subtypes have affinities to social withdrawal for different reasons.

Key words: social withdrawal, affinity for social withdrawal, young people

問題と目的

近年、長期にわたって仕事や学業などの活動から退き、社会との接触が失われるひきこもりが問題となっている(斎藤, 1998)。ひきこもりは、他者と関わる頻度が極端に減少するという特徴ゆえに、発生数の推計や実態把握が非常に困難である。

ひきこもりを引き起こす要因については、主に臨床的見地から対人関係のスキルの不足(斎藤, 2002; 忠井・本間, 2006)、極端な信念や思考(斎藤, 2002)、意思決定の困難さ(高塚, 2002)など、様々な要因が示唆されている。これらの要因の多くは、実際にひきこもっている人と接した研究者によって見いだされたものである。しかし、ひきこもりは一部の若者のみの特殊な問題ではなく、現代の日本の青年のもつ特徴や問題を反映した現象であることが論じられている(斎藤, 1998)。これまで、一般の若年者を対象とした研究でも、ひきこもりにつながる特性や行動が見られることが明らかになってい

1) 本研究は、東京都青少年・治安対策本部(2008)が実施した平成19年度若年者自立支援調査研究のデータの一部を再分析したものである。調査研究に携わった関係者の方々に感謝申し上げます。

る。松本(2003)は、一般の大学生においてひきこもりに関連する心理的特性を検討した。その結果、ひきこもりに関連する特性として、「他者からの評価への敏感さ」「自己否定・不全能」「孤立傾向」が見出された。また樋口(2006, 2008)は、大学生の中に大学には通学しているものの、対人的な交流をほとんど持たない「準ひきこもり」と呼べる学生が存在していることを指摘している。

近年では、自治体や行政による調査研究が行われ、徐々に国内のひきこもりの様相が解明されつつある。東京都青少年・治安対策本部(2008)は、無作為抽出法による調査を都内に在住する15歳から34歳までの若年者3000名に対して行い、ひきこもりの発生率が0.7%に至ることを見いだした。内閣府政策統括官(2010)では、東京都青少年・治安対策本部(2008)の調査内容に準じた調査を全国の15歳から39歳までの5000名に対して行い、国内のひきこもりの発生率が同年代のうちの1.7%にのぼることを明らかにした。

東京都青少年・治安対策本部(2008)と内閣府政策統括官(2010)の調査では、ひきこもりの発生率を推計するとともに、ひきこもりに対して親和的な考えを持ちながら実際にはひきこもっていない親和群と呼ばれる人々が存在することを示している。親和群は、若い女性を中心とする点や日常の友人関係が維持されている点でひきこもり群とは異なる独自の存在である(東京都青少年・治安対策本部, 2008; 内閣府政策統括官, 2010)。渡部・松井・高塚(2010)では、東京都青少年・治安対策本部(2008)のデータを用いて、ひきこもりとひきこもり親和性の規定因について検討した。分析の結果、対人恐怖などの精神症状や家族との情緒的絆などの要因が、一般群とひきこもり群および親和群を判別し、対人恐怖や暴力、自己決定への干渉拒否がひきこもり群と親和群を判別することが明らかになった。さらに親和群は、主にうつ症状を抱えており、自分の考え方に対するこだわりのために、他者から口出しをされることを嫌っていることが示された(渡部他, 2010)。

以上のように、親和群は実際のひきこもりとは異なる生活上の特徴や心理的特徴をもつことが確認されている。しかし、親和群の中には、ひきこもりの人と共通する精神症状を抱えるケースも含まれており(東京都青少年・治安対策本部, 2008; 内閣府政策統括官, 2010)、実際にひきこもりに移行していく可能性がある。

また、親和群が実社会の中でどのような存在であるのかという位置づけが不明確である。実際にはひ

きこもっていない人々がなぜひきこもりに対して親和性を感じているのかを含め、親和群がどのような人々で構成されるのかを明らかにすることが求められる。

本研究では、東京都青少年・治安対策本部(2008)のデータを再解析して、ひきこもり親和群の下位類型とひきこもりへの移行可能性を検討する。親和群にどのような人々が含まれるのかを検討することで、社会的不適応に至る過程や背景を解明することにつながると期待される。さらに、親和群に該当する人々のうち、どの程度の割合の人がひきこもりに移行する恐れがあるのか、ひきこもりに移行する要因は何かを明らかにすることによって、ひきこもりの予防策を検討する一助になると考えられる。

方 法

本研究では、東京都青少年・治安対策本部(2008)が行った平成19年度若年者自立支援調査研究のデータを再解析する。

調査対象者 住民基本台帳に基づく無作為抽出と相談機関への委託の2種類の方法により、調査対象者に調査票を配布した。無作為抽出調査では、東京都に住民票を有する満15歳-34歳から無作為抽出された3000名に対し質問紙を配布した。有効回答数は1388名であった。相談機関委託調査では、ひきこもり関連相談機関を訪問した満15歳-34歳の若年者に対し質問紙を配布した。有効回答数は67名であった。

調査手続き 無作為抽出調査では、調査員が対象者宅を戸別に訪問する訪問留置法によって質問紙を配布・回収した。相談機関委託調査では、ひきこもり関連相談機関にひきこもりに該当する若年者に質問紙を配布するよう要請した。配布形式は、相談員から直接配布する形式や調査対象者が自由に質問紙を持ち帰る形式など、相談機関によって異なっていた。回答済みの質問紙は調査対象者が郵送によって返送した。

調査時期 2007年9月-2008年2月であった。

調査内容²⁾ 本研究で使用した質問紙には、以下の(a)から(f)の質問項目が含まれていた。

(a) 現在の外出頻度を尋ねる項目。選択肢は「仕事や学校で平日は毎日外出する」「仕事や学校で週に3-4日外出する」「遊び等で頻繁に外出する」「人

2) 質問項目内容の詳細については東京都青少年・治安対策本部(2008)を、各下位尺度の主成分分析の結果については渡部他(2010)を参照のこと。

づきあいのためにととき外出する（例：法事や結婚式など）」「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する」「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」の8つであった。(b) 就労意識として、やりたい仕事幻想、就業回避傾向、“一人前”意識を尋ねる各2-4項目。(c) 各種意識項目として、自己愛、対人スキルの苦手意識、自己決定への不安、自己決定への干渉拒否、対立回避を尋ねる各4項目。(d) ひきこもりへの親和性として、ひきこもりへの志向性やひきこもりに理解を示す傾向を測定する4項目。東京都青少年・治安対策本部(2008)の調査項目作成において、ひきこもりの専門家である心理臨床家や精神科医から、実際にはひきこもっていないものの、ひきこもりに親和的な態度を示す若年者が面接に訪れているとの指摘を受け、ひきこもることへの願望やひきこもる人への共感を表す項目が作成された。項目内容は、「家や自室に閉じこもっていて外に出ない人の気持ちがわかる」「自分も、家や自室に閉じこもりたいと思うことがある」「嫌な出来事があると、外に出たくなくなる」「理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方ないと思う」であった。(e) 精神症状として、うつ・罪悪感、対人恐怖、強迫、暴力、依存の症状について尋ねる項目。選択肢は各症状につき4つであった。(f) 親への依存傾向として、生活上の依存、経済的依存、心理的依存、心理的独立傾向、就寝時間の乱れを尋ねる各2-4項目。

(a) 現在の外出頻度は単一回答方式、(e) 精神症状は多重回答方式であった。(b) 就労意識 (c) 各種意識項目 (d) ひきこもりへの親和性 (f) 親への依存傾向は「1. はい」「2. どちらかといえばはい」「3. どちらかといえばいいえ」「4. いいえ」の4件法であった。尺度得点化の際には、「はい」の方が得点が高くなるように逆転して得点化した。

(a) から (f) 以外に、生活状況を尋ねる項目、学歴や就労について尋ねる項目、入院・通院状況などの過去の経験やふだんの自宅での活動、相談機関の利用状況、家族との関係やふだんの悩みごとの相談相手について尋ねる項目が含まれていたが、本研究では検討を行わないため割愛する。

(b) 就労意識、(c) 各種意識項目、(d) ひきこもりへの親和性、(f) 親への依存傾向については下位尺度ごとに合計点を算出し、各下位尺度の尺度得点とした。なお、就寝時間の乱れの項目については、得点が高いほど就寝時間が乱れていることを示すように得点化した。また、(e) 精神症状については、

各下位尺度の選択肢の選択数を算出し、下位尺度の得点とした。

ひきこもり群・親和群・一般群の同定³⁾ 無作為抽出調査の (a) 現在の外出頻度において、「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する」「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」のいずれかを選択している場合を、外出頻度が低い対象者と見なした。現在の外出頻度が低かった72名のうち、専業主婦、失業して6ヵ月以内、明らかな虚偽回答などを除いた10名(有効回答数1388名のうち0.7%)を「無作為抽出ひきこもり群」とした。相談機関委託調査の (a) 現在の外出頻度において、現在の外出頻度が低かった22名を「相談機関ひきこもり群」とした。「無作為抽出ひきこもり群」と「相談機関ひきこもり群」を合わせた32名を「ひきこもり群」とした。⁴⁾

(d) ひきこもりへの親和性を尋ねる4項目の合計点を、「ひきこもりへの親和性」得点とした($M = 9.2$, $SD = 3.0$)。可能な得点範囲は4点から16点である。無作為抽出調査における得点の分布の状況から、15点から16点の対象者をひきこもりに対する高い親和性を有する「親和群」、14点以下の対象者を「一般群」とした。それぞれの群から「無作為抽出ひきこもり群」と判断された者を除いた結果、「親和群」66名(1388名のうち4.8%)、「一般群」1306名(1388名のうち94.1%)となった。

結 果

親和群の下位分類 親和群を心理的特徴に基づいて分類するに先立ち、親和群に該当する66名のサンプルを用いて、(b) 就労意識 (c) 各種意識項目 (d) ひきこもりへの親和性 (f) 親への依存傾向の下位尺度得点による主成分分析を実施した (Table 1)。成分1には、親への生活上の依存、親への心理的依存、親への経済上の依存、自己決定への不安、心理的独立が高い負荷を示していた。成分2には、自己愛、対人スキルの苦手意識、心理的独立、やりたい仕事幻想、対人恐怖が高い負荷を示していた。

3) 各群の同定については、東京都青少年・治安対策本部(2008)と渡部他(2010)にも記述されている。

4) 相談機関委託調査の対象者のうち、相談機関ひきこもり群以外の対象者については、調査実施時点でひきこもりの状態にあるとはいえないが、相談機関を訪れる他の理由を有しているものと見なし、親和群や一般群とはせず、以後の分析に加えなかった。

親和群 66名のサンプルを用いて、主成分分析の成分1と成分2の主成分得点によるクラスタ分析(Ward法)を行った(Fig. 1)。第1クラスタは成分1が平均より高く、成分2が低かった。第2クラスタは成分1が平均より低く、成分2が高かった。第3クラスタは成分1,成分2ともに平均より低かった。第4クラスタは成分1,成分2ともに平均より高かった。

各尺度の主成分負荷量と第1～第4クラスタの重心を座標軸上にプロットしたものがFig. 2である。第1クラスタは、第4象限に重心が布置され、自己評価が低く親への依存傾向が高い「低自尊依存群」として解釈された。第2クラスタは、第2象限に重心が布置され、自己評価や独立傾向が高い「高自尊独立群」として解釈された。第3クラスタは、第3象限に重心が布置され、自己評価が低く独立傾向が高い「低自尊独立群」として解釈された。第4クラスタは、第1象限に重心が布置され、自己評価や依存傾向が高い「高自尊依存群」として解釈された。

ひきこもり群、親和群、一般群とクラスタ分析によって分類された親和群の4つの下位群との関係を明らかにするために、以下の分析を行った。親和群のすべての回答者の各尺度得点に、成分1の主成分負荷量を乗じた値と成分2の主成分負荷量を乗じた値をそれぞれ標準変換し、平均値を算出した。ひきこもり群と一般群についても、成分1の主成分負荷量を乗じた値と成分2の主成分負荷量を乗じた値を算出し、それぞれ親和群の標準変換と同様の式を用いて標準変換を行い、平均値をもとめた。ひきこもり群、親和群、一般群のそれぞれの平均値を、上記の座標軸上に重ねてプロットした。

各下位群の特徴の特徴 親和群の4つの下位群のうち、低自尊依存群は25名、高自尊独立群は13名、低自尊独立群は17名、高自尊依存群は9名であった。各下位群の年齢、性別の割合をTable 2に記載する。

各下位群による下位尺度の得点の差を検討するために、被験者間一要因分散分析を実施した(Table

3)。有意な主効果がみられたのは、やりたい仕事幻想($F(3,60) = 3.23, p < .05$)、自己愛($F(3,60) = 18.04, p < .001$)、自己決定への不安($F(3,60) = 7.06, p < .001$)、対人スキルの苦手意識($F(3,60) = 16.27, p < .001$)、親への生活上の依存($F(3,60) = 25.10, p < .001$)、親への経済上の依存($F(3,60) = 17.40, p < .001$)、親への心理的依存($F(3,60) = 24.37, p < .001$)、対人恐怖($F(3,60) = 3.08, p < .05$)であった。有意な主効果の見られた下位尺度について多重比較を実施したところ、やりたい仕事幻想については、高自尊依存群が低自尊依存群よりも高かった。自己愛については、高自尊独立群と高自尊依存群が低自尊依存群と低自尊独立群よりも高かった。自己決定への不安については、低自尊依存群が低自尊独立群よりも高かった。対人スキルの苦手意識については、低自尊依存群と低自尊独立群

Table 1 親和群のデータを用いた尺度得点による主成分分析

	成分1	成分2
やりたい仕事幻想	-.042	<u>.495</u>
就業回避傾向	.020	.078
“一人前”意識	-.035	.169
自己愛	.130	<u>.767</u>
自己決定への不安	<u>.650</u>	-.304
対人スキルの苦手意識	.151	<u>-.758</u>
対立回避	.302	-.217
自己決定への干渉拒否	-.352	.102
ひきこもりへの親和性	-.106	.053
親への生活上の依存	<u>.791</u>	.128
就寝時間の乱れ	.038	.050
親への経済上の依存	<u>.663</u>	.304
親への心理的依存	<u>.762</u>	.272
心理的独立	<u>-.452</u>	<u>.690</u>
うつ・罪悪感	-.051	-.367
対人恐怖	.242	<u>-.466</u>
強迫	.125	-.025
暴力	-.053	-.089
依存	-.052	-.020

注) .400以上の負荷量に下線を記した。

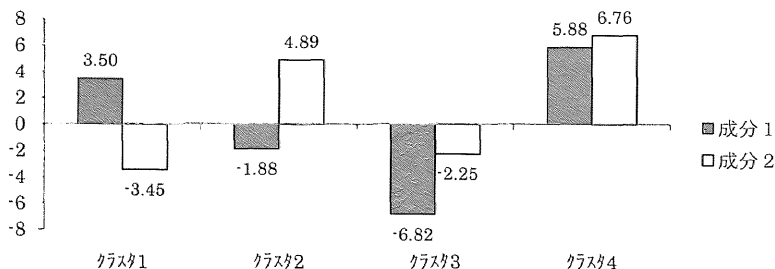


Fig. 1 各下位尺度の主成分得点によるクラスタ分析

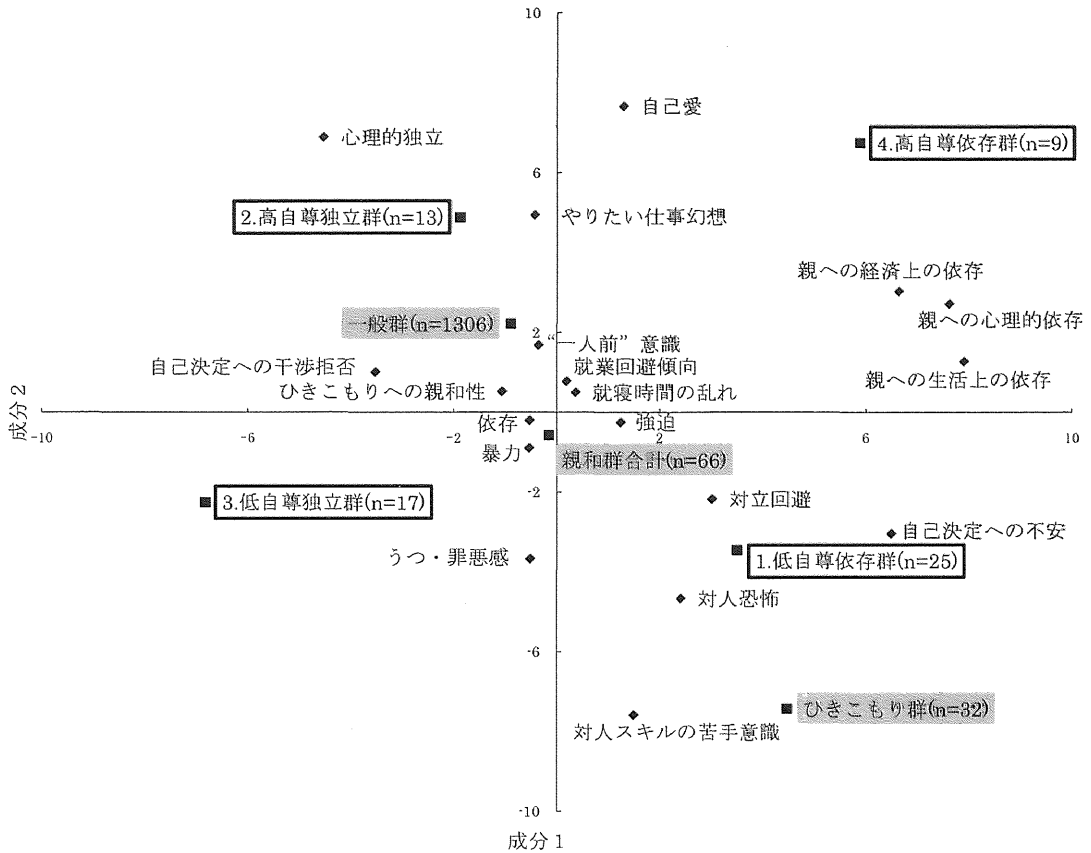


Fig. 2 各尺度得点の主成分負荷量と各クラスター重心のプロット図

注) 図を見やすくするため、各下位尺度の負荷量とひきこもり群・親和群・一般群の平均値に10を乗じた。

Table 2 各下位群の年齢・性別の割合

	n	男性	女性	15歳～19歳	20歳～24歳	25歳～29歳	30歳～34歳
1. 低自尊依存群	25	8 (32.0%)	17 (68.0%)	3 (12.0%)	13 (52.0%)	5 (20.0%)	4 (16.0%)
2. 高自尊独立群	13	4 (30.8%)	9 (69.2%)	3 (23.1%)	5 (38.5%)	3 (23.1%)	2 (15.4%)
3. 低自尊独立群	17	4 (23.5%)	13 (76.5%)	1 (5.9%)	4 (23.5%)	6 (35.3%)	6 (35.3%)
4. 高自尊依存群	9	3 (33.3%)	6 (66.7%)	4 (44.4%)	2 (22.2%)	0 (0.0%)	3 (33.3%)
合計	64	19 (29.7%)	45 (70.3%)	11 (17.2%)	24 (37.5%)	14 (21.9%)	15 (23.4%)

が高自尊独立群と高自尊依存群より高かった。親への生活上の依存については、高自尊依存群、低自尊依存群、高自尊独立群、低自尊独立群の順に高かった。親への経済上の依存については、高自尊依存群が他の3つの群より高く、低自尊依存群が低自尊独立群より低かった。親への心理的依存は、高自尊依存群、低自尊依存群と高自尊独立群、低自尊独立群

の順に高かった。心理的独立については、低自尊依存群が他の3つの群より低かった。対人恐怖については、低自尊依存群が高自尊独立群より高かった。

考 察

本研究では、クラスター分析により、ひきこもりに

Table 3 親和群の下位群による尺度得点の分散分析

		1. 低自尊 依存群	2. 高自尊 独立群	3. 低自尊 独立群	4. 高自尊 依存群	合計	<i>F</i> 値	多重比較
やりたい	平均値	12.92	13.92	12.82	14.89	13.38	3.23	$p < .05$ 4 > 1
仕事幻想	(SD)	(1.75)	(1.38)	(2.58)	(1.27)	(2.00)		
就業回避傾向	平均値	5.00	5.46	4.94	4.22	4.97	0.84	
	(SD)	(1.66)	(1.85)	(1.98)	(1.79)	(1.80)		
“一人前”意識	平均値	10.08	9.92	10.76	10.78	10.33	0.37	
	(SD)	(2.53)	(2.29)	(3.72)	(2.17)	(2.77)		
自己愛	平均値	6.24	11.23	6.29	12.00	8.08	18.04	$p < .001$ 2・4 > 1・3
	(SD)	(2.05)	(3.61)	(2.39)	(3.57)	(3.69)		
自己決定への不安	平均値	10.00	7.54	5.88	8.56	8.20	7.06	$p < .001$ 1 > 3
	(SD)	(3.10)	(2.90)	(2.00)	(3.75)	(3.30)		
対人スキルの苦手意識	平均値	11.84	6.08	10.76	7.11	9.72	16.27	$p < .001$ 1・3 > 2・4
	(SD)	(3.18)	(1.80)	(2.28)	(3.22)	(3.59)		
対立回避	平均値	13.48	11.46	12.12	13.67	12.73	2.00	
	(SD)	(2.18)	(3.97)	(3.24)	(1.66)	(2.93)		
自己決定への干渉拒否	平均値	13.04	14.62	14.29	12.78	13.66	1.55	
	(SD)	(2.73)	(1.85)	(3.06)	(3.27)	(2.79)		
ひきこもりへの親和性	平均値	15.52	15.77	15.76	15.67	15.66	1.22	
	(SD)	(0.51)	(0.44)	(0.44)	(0.50)	(0.48)		
親への生活上の依存	平均値	10.72	8.31	5.29	13.33	9.16	25.10	$p < .001$ 4 > 1 > 2 > 3
	(SD)	(2.98)	(3.09)	(1.21)	(2.00)	(3.70)		
就寝時間の乱れ	平均値	6.08	5.77	5.59	5.22	5.77	0.64	
	(SD)	(1.63)	(1.88)	(1.66)	(1.79)	(1.70)		
親への経済上の依存	平均値	9.48	7.77	5.94	13.11	8.70	17.40	$p < .001$ 4 > 1・2・3, 1 > 3
	(SD)	(2.90)	(2.71)	(1.68)	(2.37)	(3.36)		
親への心理的依存	平均値	11.04	10.15	5.59	13.67	9.78	24.37	$p < .001$ 4 > 1・2 > 3
	(SD)	(2.64)	(2.54)	(2.50)	(2.40)	(3.71)		
心理的独立	平均値	9.40	14.00	13.41	14.33	12.09	18.49	$p < .001$ 2・3・4 > 1
	(SD)	(2.69)	(1.68)	(2.06)	(2.55)	(3.17)		
うつ・罪悪感	平均値	2.48	1.85	2.59	1.67	2.27	1.45	
	(SD)	(1.19)	(1.52)	(1.33)	(1.80)	(1.41)		
対人恐怖	平均値	2.20	0.92	1.53	1.33	1.64	3.08	$p < .05$ 1 > 2
	(SD)	(1.32)	(0.95)	(1.28)	(1.66)	(1.36)		
強迫	平均値	0.92	0.92	0.82	1.11	0.92	0.19	
	(SD)	(0.86)	(1.04)	(0.88)	(1.05)	(0.91)		
暴力	平均値	0.60	0.38	0.35	0.11	0.42	0.80	
	(SD)	(1.00)	(0.87)	(0.79)	(0.33)	(0.85)		
依存	平均値	0.48	0.54	0.47	0.22	0.45	0.34	
	(SD)	(0.65)	(0.97)	(0.80)	(0.67)	(0.75)		

親和性を示す親和群を高自尊依存群, 高自尊独立群, 低自尊独立群, 低自尊依存群の4つの下位群に分類した。低自尊依存群は, 親に依存しており, 自己についての自信がない群である。高自尊独立群は, 親への依存傾向が低く, 自己についての自信を持っている群である。低自尊独立群は, 親への依存傾向は低い, 自己について自信がない群である。高自尊依存群は, 親に依存しているが, 自己について自信を持っている群である。

4つの下位群のうち, 低自尊依存群は自己の問題

を決定することや対人関係についての自信がない状態であった。生活や経済に関して親に依存する傾向が高く, 特に心理的な独立傾向が低いことは, 全体的な自信のなさによるものであると考えられる。対人恐怖も高いことから, 他者の中で行動することが困難であり, ひきこもりに対して親和的な感情を感じるものと推測される。

高自尊独立群と低自尊独立群は, 親から独立している点では共通している。しかし, 高自尊独立群は自己評価が高いのに対して, 低自尊独立群は自己評

価が低かった。低自尊独立群は高年齢が多く自立した生活を送っているが、心理面では自信がなく萎縮しており、ひきこもりに親和的な感情を抱いていると考えられる。高自尊独立群は、Fig. 2において一般群と同じ象限に布置されており、4つの下位群の中では比較的適応状態が良い群である。しかし、高自尊独立群が、ひきこもりに親和性を持つ背景として、本研究で検討に含まれなかった何らかの別の要因がある可能性も残されており、この群を一般群と同様であると見なすことは早急であろう。

高自尊依存群は、低年齢が多く、日常生活においては親に密着していた。自己評価が高く、仕事に関する自分の考えにこだわりを持っていた。高自尊依存群は、自己へのこだわりが強いために、他者との関係を避け、ひきこもりに親和性を示すと考えられる。

Fig. 2をみると、低自尊依存群はひきこもり群と同象限に布置している。また、低自尊依存群は、渡部他(2010)で指摘された、対人関係についての自信がないというひきこもり群の特徴と類似した傾向を持っていた。以上から、親和群の4つの下位群の中で、低自尊依存群はひきこもり群に近い特徴を持つ群であり、実際にひきこもりに至る可能性が高い群であると考えられる。

本研究では、親和群の中にひきこもりに移行しやすい層が存在することを明らかにした。また、ひきこもりに親和性を抱く要因は様々であり、実際にひきこもっている層とは異なる特徴からひきこもりに親和性を感じている若年者がいることも見いだされた。すなわち、親和群の中には実際にひきこもっている人(ひきこもり群)とは異なる心性を持つ人と、ひきこもり群と類似した心性を持つ、いわば「ひきこもり予備軍」に該当する人が混在していることが明らかになった。この「ひきこもり予備軍」は、意

思決定や対人関係スキルについての自信がなく、人と接することに恐怖を感じているという特徴を有していた。

引用文献

- 樋口康彦(2006). 大学生における準ひきこもり行動に関する考察—キャンパスの孤立者について—国際教養学部紀要, 2, 25-30.
- 樋口康彦(2008). 準ひきこもりに関する基礎的研究 国際教養学部紀要, 4, 147-153.
- 松本 剛(2003). 大学生のひきこもりに関連する心理的特性に関する研究 カウンセリング研究, 36, 38-46.
- 内閣府政策統括官(2010). 若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査)報告書 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)
- 斎藤 環(1998). 社会的ひきこもり—終わらない思春期— PHP 研究所
- 斎藤 環(2002). 「ひきこもり」救出マニュアル PHP 研究所
- 忠井俊明・本間友巳(2006). 不登校・ひきこもりと居場所 ミネルヴァ書房
- 高塚雄介(2002). ひきこもる心理とじこもる理由—自立社会の落とし穴— 学陽書房
- 東京都青少年・治安対策本部(2008). 実態調査からみるひきこもる若者のこころ(平成19年度若年者自立支援調査研究報告書) 東京都青少年・治安対策本部総合対策部若年者課
- 渡部麻美・松井 豊・高塚雄介(2010). ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討 心理学研究, 81, 478-484.
- (受稿4月11日:受理5月11日)